カラーブラインドとポリティカル・コレクトネス
――グアム・チャモロ人の先住民運動を事例として――

日本学術振興会（明治学院大学）　長島怜央

1　目的

本報告の目的は、グアムにおけるチャモロ人の社会運動とカラーブラインド・イデオロギーの相克状況に、「ポリティカル・コレクトネス（PC）」概念がいかに関係してきたかを明らかにすることである。アメリカや世界各地におけるマイノリティや先住民の社会運動と共鳴する形で、1970 年代以降のグアムのチャモロ人の運動も展開してきた。具体的には、先住民としての自己決定権や土地権の要求、言語や文化の復興運動（ルネサンス）などであり、先住民運動として括ることができるものである。しかしながら、この先住民運動は当初からチャモロ人・非チャモロ人双方によって「逆差別」として懐疑的な目を向けられ、とくに 2000 年以降には本土出身者らからのバックラッシュというべき状況に直面してきた。カラーブラインド（肌の色を区別しない）・イデオロギーが展開してきたのである。

2　方法

1970 年代から 2017 年現在までのチャモロ人の政治的・文化的諸権利の運動・法制度とそれらに関する議論の変遷を関連資料から明らかにし、整理する。用いるデータは、公文書、法律、統計資料、新聞・雑誌記事、住民団体のビラ・パンフレット・報告原稿、関係者のインタビューなどである。

3　結果

グアムのネイティヴ（原住民）の呼称として、第 2 次世界大戦後はアメリカ連邦政府が用い始めた「グアメニアン（グアム人）」が定着していたが、1970 年代以降に草の根の動きによって「チャモロ」が再び用いられるようになった。また、チャモロ語やチャモロ文化が学校教育のなかに取り入れられるようにもなった。こうした呼称変更やカリキュラム変更は、アメリカ国内外のマイノリティの運動と軌を一にする。いわば、PC 概念によってチャモロ人の運動が刺激されたのである。

多文化主義や PC の浸透によって、当然のことながら、「本土出身者（白人）」によるチャモロ人に対する露骨な差別的言動は抑制されていった。その一方で、チャモロ人を特定の性質や慣習に結びつけて揶揄したり、貶めたりすることは続けられた。たとえば、チャモロ人を汚職と結びつける言説がある。こうしたものは文化的レイシズムと捉えられる。

また、PC はカラーブラインド・イデオロギーと必ずしも相反するものではなかった。形式的平等、反差別、多元性といった諸概念とのみ結びつき、歴史的正義の概念から切り離されれば、PC はカラーブラインド・イデオロギーとなりうる。

4　結論

グアムにおける先住民運動やカラーブラインド・イデオロギーの展開と、PC は複雑に絡まり合ってきたことが分かる。PC にいかなる立場を取るにせよ、それが歴史的（不）正義を等閑視するカラーブラインド・イデオロギーに容易に取り込まれ得るということに留意すべきである。

文献

Bonilla-Silva, Eduardo, 2013, *Racism without Racists: Color-Blind Racism and the Persistence of Racial Inequality in the United States*, Fourth Edition, Lanham: Rowman & Littlefield.

長島怜央，2015,『アメリカとグアム：植民地主義、レイシズム、先住民』有信堂高文社.